

18 世紀イギリス「都市ルネサンス論」再考

小西 恵美

はじめに

イギリス 18 世紀の都市研究は、長い間、研究史上空白の領域であった。中世に栄えたイギリスの地方都市のほとんどが「中世末の危機」からなかなか立ち直れず、産業革命で復活をとげる時期までその活力を取り戻せなかったという暗黙の想定が、この空白の背景にあったと考えられる。

社会経済史の視点からいえば、18 世紀は都市の時代というよりも、農村と農村工業の時代であったといつてよいし、また 18 世紀の都市は、中世以来、都市がもち続けた特権や規制によって成長を阻害されていた場であった。したがって、都市の研究者の興味の対象は、産業革命期以降に急速な工業化や人口増加を経験した都市におかれることが多かった。しかし、こうした「量的都市化」というべきもののだけが、都市化と呼ばれるものなのだろうか。

18 世紀のイギリスは、19 世紀とはまた別の意味で、都市化の時代であった。これをはじめて正面から扱ったのは、P. ボーゼイである¹。彼は王政復古期から 18 世紀後半（1660–1770 年）の都市の質的な変化に注目し、イギリス「都市ルネサンス」という言葉でこれを表現した²。ボーゼイは、この時代の都市には産業革命期に続く時期に比類する人口増加や産業の発展は見られないものの、都市生活の質の点で大きく変化したことを主張したのである。

本稿は四半世紀以上前に出されたこの「都市ルネサンス論」の概念を再吟味し、長期の 18 世紀におけるイギリス都市を解明するためのキー概念として再構築することを試みる³。I では、ボーゼイの議論のポイントを紹介する。II では、ボーゼイの「都市ルネサンス論」に対する批判やその応用研究をサーベイする。III と IV では、こうした最近の研究成果を踏まえ、筆者のフィールドであるキングス・リンの事例を交えながら「都市ルネサンス」を再定義し、その適用可能性をさぐっていききたい。

¹ Borsay, Peter, "The English urban renaissance : the development of provincial urban culture c.1680-1760, *Social History*, No. 5 (1977).

² ボーゼイは 1977 年の論文では都市ルネサンス期の期間を名誉革命期から 1760 年としていたが、1989 年に出版された著書では、王政復古から 1770 年までと前後に延ばしている。Borsay, P., *The English Urban Renaissance: Culture and Society in the Provincial Town, 1660-1770*, Oxford (1989).

³ 日本では「都市ルネサンス」については、ボーゼイらの研究を受けて、川北稔が疑似ジェントルマンと都市の生活文化の変化について議論した論文がある。川北稔「イギリス近世都市の特質と魅力—17・18 世紀の「都市ルネサンス」—」、都市問題研究会『都市問題研究』40–9 (1988)。

I ボーゼイの「都市ルネサンス論」

ボーゼイは「都市ルネサンス」という言葉をかなり自由に、あるいは多義的に用いている。しかしとりわけ二つの側面での「ルネサンス」を強調した。一つは建築ルネサンス、もう一つは文化ルネサンスである。建築ルネサンスとは、この時期に生まれた新古典派様式の建物を中心とし、通りや町の一角に、統一感のとれたファッショナブルな景観が出現することをいう。17世紀前半、富裕層は家の内装を充実させる努力をしていたが、これは、他人の目を気にしての行為というよりは、むしろ自己満足や自己の実現の側面が強かったと考えられる。しかしその後、内装だけではなく外装に目が向けられる中、自分の家だけでなく、隣近所の外装との調和も考慮されるようになり、ファサードの統一が進んだ。17世紀末には、それまでの地方色豊かな田舎風様式とは異なる、新古典派様式と呼ばれる新しい建築様式も確立した。ある区画が見た目の統一感を達成すると、次には建物に接する通りや広場に目が向けられた。狭く曲がりくねり泥まみれだった道路は、広くまっすぐに舗装され、街灯も敷設され、また、建物に囲まれた一角には人々の憩いの場としての広場が作られ、遊歩道もできた。そして、次第に個人の建物だけでなく、市庁舎や教会からアセンブリホールや劇場、図書館、学校に至るまで、公共の建物や部屋の建築も活発になった。インやタバーン、エールハウスなどの商業施設でも、新しい都市のスタンダードに追いつくよう内装や外装、そして建物の中の作りにまで手を入れられた。こうした一連の過程を建築ルネサンスと呼んでいる。審美性の追求が都市のグレードを上げることになり、都市はこぞって建築ルネサンスを振興させようとした。こうして都市ルネサンスのハードの側面が整うことになった。

建築ルネサンスとほぼ同時進行で起こったのは、文化ルネサンスとボーゼイが呼ぶものである。インフラが整備され、いくつもの公共の建物ができ、商工業施設も整ってくる中、都市はポライトな社会生活を提供する場、すなわちレジャーを提供する空間にもなった。各種会合や食事会、舞踏会、カードゲーム、演劇や演奏会、展示会、クリケットや競馬や各種スポーツイベントなどの新しい社交は、会費さえ負担できれば、どんな人でも参加できるオープンなものであった。とはいえ、頻繁にこうした商業イベントに参加できる者は、実質的にはミドルングソートやジェントリに限られていたことはいうまでもない。人々はイベントの場を、自身を大いにディスプレイする場として積極的に利用した。他の参加者を観察、比較し、時に参加者同士で仲間意識を強める一方で、参加できない者への優越意識や社会的差異をみせつけたのである。

ボーゼイによると、都市ルネサンスは、人々が社会的地位を追求する中で実現されるものである。当時、社会的地位を高めるのに必要なものは、ジェンティリティであった。ジェンティ

リティは、元々は家柄や血縁など、祖先から「継承」するものであったが、この頃になると、「獲得」できるものと考えられるようになってきた。家の内装や所有物の種類やセンス、服装や装飾品といった衍示的消費につながる物を所有することや、社交イベントでの経験、教育や教養、公的な仕事・慈善活動などに関わってシビリティを身につけることによって、ジェンティリティを獲得することが可能になった。家柄の良いジェントリであっても、これらのジェンティリティの要素をもたないと社会的地位はついてこないし、逆に、商工業者であってもこうした要素をもつことで社会的地位を高めることができるようになった。このように、人々は社会的地位を求めて、他者と競争するかのようにジェンティリティを獲得しようと試みたが、その結果として、ジェントリやミドリングソートといったこの動きに乗じられる者と、そうでない者が出現する、すなわち一般大衆の中での文化の差異化がおこったことも、ボーゼイは指摘している。

結局のところ、地方都市にとって最大の「都市ルネサンス」の効果は、16、17世紀の宗教改革や内乱、経済危機により失われた都市の文化的活力が復活したことであった。それには大きな経済的基盤を必要とされたが、ジェントリやミドリングソートが資金の調達に大きな役割をもっていたことは明らかである。

II ボーゼイの「都市ルネサンス論」への問題提起

ボーゼイの唱えたイギリス都市ルネサンス論は多くの議論を呼んだ。その主な論点を以下で整理してみよう。第一に、都市ルネサンスの地理的な広がりの問題がある。都市ルネサンスという現象が、ボーゼイの主張するようなイングランドの都市全般的な兆候ではなく、一部の例外的な都市でのみ起こったことであると批判したのは A. マッキネスである⁴。マッキネスは、ボーゼイが例としてあげた都市のサンプルは偏っており、バースを代表とするリゾート都市や州都市はどれも、都市ルネサンス以前からジェントリの訪問が多く、すでに地域の社交の中心としての地位が確立していたことを指摘した。そしてレジャー都市ともいべきシュルズベリーを例にとって、確かに都市ルネサンスが進行していたことを実証しつつも、あくまでもそれは特殊な都市で見られた現象にすぎなかったと議論した。この批判に対し、ボーゼイは、小都市でさえアセンブリやコンサート、競馬などが 1760 年代までに出現していたことをあげ、規模の差こそあれ、都市ルネサンスは大都市から市場町のような小都市に至るまで、イングラ

⁴ McInnes, Angus, 'The emergence of a leisure town: Shrewsbury 1660-1760', *Past and Present*, 120 (1988).

ンド全体の現象であったことを再度主張した⁵。しかし事例としてとりあげた都市に偏りがあったことは否めず、新興の商業都市の例はボーゼイの議論にはほとんど含まれていない。

これに関連して示唆に富む最近の研究に、L. シュウォーツによるものがある。ボーゼイは、都市ルネサンスはイギリスの都市の全般的傾向であるとしたが、その普及度や影響力の大きさという点については、「一般原則として、大都市で繁栄度が高く裕福なコミュニティ、とりわけリゾート都市や地域の中心都市 **regional town**（州都市を含む）、地方の首都、そしてロンドンでは、小規模で衰退しつつある貧しいコミュニティと比較してよりインパクトは強い」と格差があったことを認めている⁶。ボーゼイはここで、「リゾート都市や地域の中心都市」という分類を用いている。しかしシュウォーツは、この分類に入らないが都市ルネサンスの達成度の高かった新興の製造業や港湾都市の存在を指摘した上で、居住レジャー都市 **residential leisure town** という分類を用いて都市ルネサンスとの関係を論じた⁷。シュウォーツは、相当な富裕者でないと保有できない奢侈品であった男性使用人の雇用数を指標として各都市の富裕度を測り、30人以上男性使用人が存在する都市を居住レジャー都市と命名した。その上位にはリバプールやバーミンガム、マンチェスターなどの新興都市も入る一方で、州都市や地域の中心都市でも上位に入らない都市も少なくない。シュウォーツは、上位の居住レジャー都市ほど、都市ルネサンスの影響力が大きかったとしているが、従来、質的都市化の面からは注目されていなかった新興工業都市や港湾都市が都市ルネサンスに大きく関与していたことを明らかにした点で興味深い。

第二に、ロンドンと地方都市の関係、あるいは都市ルネサンスの普及のプロセスをめぐる問題がある。ボーゼイの主張では、宮廷文化（ハイカルチャー）の流れをくむロンドン発の文化が、社会的模倣を通じて、地方大都市、中都市、そして小都市と全国に滴下していく都市ルネサンスの過程がとらえられているが、それに疑問を唱えたのはJ. エリスである⁸。確かにボーゼイは、新古典派建築様式の起源は宮廷関係の建築物にあり、その建築にかかわった職人が同様の様式でロンドンに作ったものが訪問者を通じて、または出版されたパターンプックにより地方に普及していったと説明しており、都市ルネサンスの一枚をなす建築ルネサンスがロンドン発であることを示唆する。しかしエリスは、必ずしも地方都市がロンドンのみを見据えていたのではないと議論した。たとえば、地方都市がファッショナブルな通りを新たに命名するの

⁵ Borsay, P., 'The emergence of a leisure town: or an urban renaissance?', *Past and Present*, 126 (1990).

⁶ Borsay, P., 'The emergence of a leisure town: or an urban renaissance'.

⁷ Schwarz, Leonard, 'Residential leisure towns in England towards the end of the eighteenth century', *Urban History*, 27-1 (2000); Stobart, Jon & Schwarz, L., 'Leisure, luxury and urban specialization in the eighteenth century', *Urban History*, 35-2 (2008).

⁸ Ellis, Joyce M., *The Georgian Town, 1680-1840*, London (2001), Ellis, J.M., "For the honour of the town": comparison, competition and civic identity in eighteenth-century England', *Urban History*, 30-3 (2003).

に、いつでもロンドンを連想させるような名前をつけていたわけではなく、バースやその他の都市に関連する名前をとっているケースもしばしばみられることを指摘した。また、どの地方都市も「小ロンドン」となることをめざしたのではないことも主張した。すなわち、地方都市がロンドンのファッションをそのまま模倣し、その結果、画一化したナショナルな都市文化ができたわけではないということである。地方都市は常に他都市との比較をしており、時に最新のロンドンのファッションを取り入れたものの、同レベルの都市との競争の中で分相応の改善を進めるなどの主体的な選択を行っていたのであり、滴下理論や社会的模倣を強調されるべきではないとした。

これと密接に関連した第三の論点として、地方都市のアイデンティティをめぐる問題がある。この時期の都市で全国共通の文化が確立したことよりも、むしろ地元意識や都市のもつ固有のアイデンティティが強くなったことを強調しているのは J. バリーや R. スウィートであり、彼らもまた、前述のエリスと同様に滴下理論や社会的模倣を否定している。バリーは、地方都市がロンドンの流行をたとえ真似たとしても、それは地方都市に役にたつ必要なものだから選択的に取り入れたのであって、やみくもに模倣しているわけではないと考えた⁹。さらにバリーは、18 世紀の都市文化は、ボーゼイのこのような産業革命後につながる新しい洗練された文化ではなく、むしろ 17 世紀以前の伝統的な民衆文化の発展型であり、前の時代との継続性を強調したのである。スウィートも、この時期の都市の人々が、自分たちの都市の歴史や慣習に誇りをもち、そういうものを通じて都市への帰属意識を強めていったと主張した¹⁰。バリーもスウィートも、ボーゼイの新しいナショナルな都市文化の形成を否定しているわけではないが、伝統的なローカルな文化や前の時代との連続性も、18 世紀の都市文化の重要な要素であったとしている。

第四に、都市ルネサンスの農村社会への影響に関わる問題がある。農村との関係について真っ向から反対の意見を唱えているのは、C. B. エスタブルックである¹¹。ボーゼイは、18 世紀の都市には農村からの多くの訪問者が存在したことや、また印刷技術や交通網の発展により、都市の情報を伝える多様な出版物が農村にも普及したことから、都市ルネサンスの影響は都市部だけでなく農村部にまで拡大していたとする。そもそも、一般に 18 世紀はそれ以前と比べ、都市と農村の結びつきが強くなったといわれている。拡大する都市経済には農村からの労働力

⁹ Barry, Jonathan, 'Provincial town culture, 1640-1780: urbane or civic?', in Pittock, J.H. & Wear, A. eds., *Interpretation and Cultural History*, London (1991); Barry, J., 'Civility and civic culture in early modern England: the meanings of urban freedom', in Burke, P., Harrison, B., & Slack, P. eds., *Civil Histories: Essays Presented to Sir Keith Thomas*, Oxford (2000).

¹⁰ Sweet, Rosemary, *The Writing of Urban Histories in Eighteenth-Century England*, Oxford (1997); Sweet, R., *Antiquaries: The Discovery of the Past in Eighteenth-Century Britain*, London (2004).

¹¹ Estabrook, Carl B., *Urbane and Rustic England: Cultural Ties and Social Spheres in the Provinces, 1660-1780*, Stanford (1999).

が不可欠であり、都市と農村の人口の移動が活発になったからである。しかしエスタブルックはブリストルとその近郊の事例研究をもとに、農村と都市の人の移動があったにもかかわらず、少なくとも 18 世紀末に郊外化が進む以前は、人々は新しい地に定住しても、都市出身者は都市文化、農村出身者は農村文化といったように、それぞれが自分たちの出身地の文化に固執していたという。したがって農村が都市ルネサンス時代の文化を共有していたという考え方に懐疑的であり、洗練された都市文化と農村文化は決して相補的なものではなく、むしろ反駁するものであるとした。エスタブルックの議論はブリストル近郊の特殊な事例のみで有効なのか、それとも全般的に有効なのか、他の事例がないので判断できない。しかし、都市ルネサンス的な様々な要素がどの程度農村まで広がったのか、また農村のどの社会層まで浸透したのか、さらなる研究が必要である。

第五に、ボーゼイが都市ルネサンス論を唱えた当初から続く議論の一つとして、時期の問題がある。ボーゼイの著書の副題にあるように、彼がイギリス都市ルネサンスの時期を 1660 年から 1770 年と考えているのは明らかである¹²。しかし王政復古期にボーゼイのこのような建築物や文化インフラをもてた都市はロンドンくらいのものである。古くからの地方大都市でさえ、都市ルネサンスへの動きは名誉革命期以降にようやくはじまったのであり、1660 年を都市ルネサンスの始点とするには疑問が残るとする者もいる。また、ボーゼイの考察からは外れた製造業都市や商業都市を含むそのほか多くの都市の動向を見ると、それらの都市では 1770 年よりむしろ後に、質的な変化を遂げていることを指摘する研究者も多い。近年、J. ストバートや J. ベケットらが都市ルネサンスの第二波という考えを示している¹³。彼らは、ボーゼイが主張した王政復古期から 1770 年までの期間を、リゾート都市や州都市を中心とした都市ルネサンス期の第一波ととらえた。一方、バーミンガムやマンチェスター、リバプールといった製造業や港湾機能をもつ新興の都市では、1780 年以降に前者のグループと同様の質的都市化がはじまったが、それを都市ルネサンスの第二波と表現したのである。

III 都市ルネサンスの再解釈

ボーゼイのオリジナルのイギリス「都市ルネサンス論」とそれをめぐる四半世紀にわたる議論を整理してきた。多方面からの批判や疑問が出されてきたにもかかわらず、ボーゼイが「都市ルネサンス」と呼んだような、ある質的な変化が 18 世紀のイギリスの都市で見られたこと

¹² Borsay, P., *The English Urban Renaissance*.

¹³ Stobart, J., 'Culture versus commerce: societies and spaces for elites in eighteenth-century Liverpool', *Journal of Historical Geography*, 28-4 (2002); Beckett, John & Smith, Catherine, 'Urban renaissance and consumer revolution in Nottingham, 1688-1750', *Urban History*, 27-1 (2000).

には、異論が唱えられているわけではない。都市ルネサンス論は、18 世紀の都市化を全般的な現象としてとらえるために有効な総合的視点を提供するものと考えられる。しかしそのためには、上記の批判や問題点を踏まえて、「都市ルネサンス」の概念を広げ、一部修正する必要がある。とりわけ重要な修正点として以下の三点が考えられる。まず、都市ルネサンスの時期を広げること、次に滴下理論にもとづくロンドンのファッションの模倣だけでなく、もっと広い意味で、アメニティを求める新しい都市的生活様式を考えること、そして、ボーゼイも触れてはいるが十分議論していなかったボランタリ・アソシエーションの重要性を強調することである。以下では、キングス・リンの事例を交えながら、順に議論していきたい。

1. 時期

時期設定は、「都市ルネサンス」の定義いかんによって異なってくる。前節で述べたように、ボーゼイはイギリス都市ルネサンス期を 1660 年から 1770 年に設定しているが、1660 年は地方都市の質的变化の開始には早すぎるし、また最近の研究にしたがえば、1770 年以降に都市ルネサンスを経験する多くの都市があったとされることから考えても、時期に関しては見直しが必要である。しかし、確かに 1660 年は地方都市にとっては早すぎるが、ロンドンでは間違いなく質的な変化が王政復古期に見られた。ボーゼイは、都市ルネサンスを地方都市の現象として描いているが、後述するように、ロンドンを含めたイギリスの都市における全般的な現象ととらえなおすことで、1660 年という時期設定は妥当と思われる。もっともロンドンにしても、質的变化が本格化するのには名誉革命期以降である。

一方、終期を 1770 年とすると新興都市の成長を無視することになり、再考が必要なことは明らかである。しかし、ストバートらのいうように 1780 年を境に都市ルネサンス第一波・第二波と明確に分けることにも問題が残る。1770 年以前にはじまった都市であっても、1770 年までに必ずしも都市ルネサンスは終期を迎えているわけではないからである。たとえばウェスト・ノーフォークの中心地として中世以来栄えている港湾都市キングス・リンでは、会費制のコンサートが 1750 年代にははじまっており¹⁴、アセンブリルームやゲームルームも 1769 年に市庁舎の奥に増築という形で作られている¹⁵。しかし、キングス・リンはボーゼイも著書の中で例として挙げていた都市であるが、そこで質的な都市化が活発化するの実は 18 世紀末から 19 世紀初頭であり、その活動の中心にあった法定委員会の道路舗装委員会が設立したのは 1803 年のことであった¹⁶。この事例からわかるように、都市ルネサンスの進行は、ボーゼイが

¹⁴ Fawsett, T., *Music in Eighteenth Century Norwich and Norfolk*, Norwich (1971); *Norwich Mercury* 1753/1/27, 1753/8/11.

¹⁵ King's Lynn Borough Archive, KL/C7/14 Hall Book.

¹⁶ 小西恵美「地方行政組織の変化と連続—長期の 18 世紀キングス・リンの事例—」『比較都市史研究』22

想定したよりも長期にわたることも多く、これらの都市に関しては、1770年に区切りを設けることはあまり意味がないと思われる。

都市ルネサンス期の終期は1770年以降に延ばされるとして、それではどこまで延ばすのが妥当なのだろうか。一般に、長期の18世紀の終期は、第一次選挙法改正（1832年）や都市自治体法（1835年）といった中央政府主導の重要な改革が続き、地方行政や地方都市の大きな転換期であった1830年代と考えられている。確かに、選挙人の数も大幅に増加し、法人格をもたない都市も正式な都市として認可され、市会をもてるようになり、選挙で市会議員を選出するようになった1830年代は都市行政上の大きな転機である。しかし、都市ルネサンスの終期も1830年代と考えられるのだろうか。

たとえばキングス・リンでは、第一次選挙法改正によって選挙権はフリーメン資格に加え、資産資格でも付与されることになり、選挙人の数が一挙に増加した。1835年の選挙人名簿によると、全865人のMP選挙人のうち、フリーメン資格者は242人（28%）、有資産資格者は623人（72%）である¹⁷。また、1835年の都市自治体法では、はじめて市会議員が選挙で選出されるようになり、またフリーメンであるかどうか選出には関係がなくなった。これによって新しい市会議員の構成は、半分くらいが替わったため、新しい時代の幕開けのように見える。しかし、この構成員の変化は、実際はそんな単純なものではなかった。1835年以降の新規の市会議員は、その大半が、実はそれ以前から法定委員会やアソシエーションといった別の行政組織の活動で中心的な働きをしており、各種社交イベントにも参加していたし、コーポレーションの活動にすら、間接的ではあったがかかわっていた者も少なくなかった。このことは、19世紀に入っても大きな経済変化のない、連続性が顕著なキングス・リンのような都市では、都市ルネサンスについても1830年代に転機を求める根拠はかならずしもないことを示す。たとえば1840年代に新設された大きな施設やアソシエーションだけでも、非国教会系の学校（1842年）、リン文芸座談クラブ Lynn Conversazione and Society of Arts（1842年）、キリスト教会研究ソサエティ Lynn Ecclesiology Society（1844年）、キングス・リン博物館（1844年）とあげられ、これらのアソシエーションの主要なメンバーには都市エリートのみならず、相変わらず近隣のジェントリも名前を連ねており、1830年代以降も都市ルネサンス的な側面をキングス・リンはもち続けていたといえる。

しかしその一方で、1830年代までに、特に北部の諸都市では、工場制度の出現や急速な人口

ー2（2003）；小西「長期の18世紀イングランドの地方都市行政とコミュニティーキングス・リン舗装委員会を中心に」イギリス都市農村共同体研究会・東北大学経済史・経営史研究会編『イギリス都市史研究—都市と地域—』日本経済評論社（2004）。

¹⁷ キングス・リンの選挙人に関する詳細は、以下を参照のこと。小西「1830年代の都市改革：キングス・リン選挙人の分析から」『専修大学人文科学年報』（2005）；小西「近世イギリス都市におけるフリーメン制度の意義—キングス・リン1636—1835年—」『三田商学研究』48—4（2005）。

増加と都市環境の悪化、労働者階級の貧困などの社会問題、都市問題が深刻さを増してきた。それとともに、都市ルネサンスの担い手であった裕福なミドリリングソートが住居を都市の外に求める郊外化の動きが進行した。ジェントリもまた地方都市の社交から撤退する傾向が見られた。鉄道の出現はやがてこの傾向を促進することになる。都市ルネサンスについての画一的な終期を設定することはできないが、これらの都市に関しては一つの区切りとして 1830 年代と考えるのは妥当と思われる。

2. アメニティを求める新しい都市的生活様式

ボーゼイの強調するナショナルな都市文化は、ロンドン発信の文化をそれ以外の都市が模倣する中で確立したとされている。しかし、バリーらの批判にあるように、18 世紀の地方都市がそれぞれの文化の独自性を強調するようになったことも確かである。たとえば州都市チェスターの例をあげておこう。チェスターでは、都市の富裕者たちが流行の新古典派様式の住宅を建てようとした際、コーポレーションは、「もっともチェスターらしい」といわれる一番の中心部には建築を認めず、そのかわりに町の中心から少しはずれた一角に新しい建築物を集めた¹⁸。しかしこれをローカルな文化に強く固執し、ロンドン発のナショナルな文化をないがしろにする試みの例と考えるのは間違っている。これには伝統的様式でのまとまりがある中心部に、新しい様式が混在するとむしろ審美性が失われるといった判断もあった。また、古い建物が少ない一角に集められたファッショナブルな新しい住宅は、町の新しい魅力を作り出すことにもなったのである。

このチェスターの建築物の例に見られるナショナルな文化とローカルな文化の混在は、地方都市がいずれかの文化に固執したわけではなく、むしろ見た目の統一感といった景観を意識し、審美性を追求しつつ、新しい快適でファッショナブルな都市空間を作り出そうとしたことを示す。いかに多くのジェントリや富裕層を惹きつけるか、各都市が工夫をこらす中で、都市ルネサンスをロンドンの流行の模倣やナショナルな文化に限定する必要はない。また、ボーゼイは地方都市に限定して都市ルネサンスを考察したが、ロンドンが真っ先に、圧倒的な規模の文化的変容をとげたことを考えれば、都市ルネサンスを、ロンドンを抜きにして地方都市の現象として片づけることはできない。ロンドンでも地方都市でも共通に求められたのは、都市生活の快適性や便利性、審美性、ポライトネス、ジェンティリティといったものであり、それを支える施設や社会関係であった。「都市ルネサンス」はこうして生まれた新しい都市的な生活様式一

¹⁸ Stobart, J., 'County, town and country: three histories of urban development in eighteenth-century Chester', in Borsay, P. & Proudfoot, L.J. eds., *Provincial Towns in Early Modern England and Ireland: Change Convergence and Divergence*, Oxford (2002).

般を表すものとするのが適当である。このように再解釈された都市ルネサンスの要素を、以下で見ていくことにしよう。

先にも触れたように、都市ルネサンスでもっとも目につく変化はハード面の整備であり、都市のシンボルになるような公共的な建物だけでなく、商業施設でも次々に流行スタイルが取り入れられ、都市ルネサンスの核となっていく。主要な通りに設置された街灯は夜のイベントの雰囲気を高めていたし、アウトドアの社交の場として、遊歩道や庭園、スクエア、ボーリング・グリーンなどを作る都市も少なくなかった。こうした変化についてはボーゼイがもっとも強調しているところである。

18 世紀の都市ルネサンスの展開にとって重要な役割をもった要因として忘れてならないものの一つは、人や物の移動を促す道路や港湾、水路の整備やコミュニケーション手段の改善である。都市間を結ぶ定期馬車便網はこの時期、急速に広がり、主要都市間はもちろんのこと、中小都市もそのネットワークにどんどん組み込まれていった。一方で、馬車や道路の改良は人や物や情報の流れを促すことになった。大型化する馬車に耐えられるような道路が供給され、運べる人の数や物の量は拡大し、馬車の便数も増えた。こうしたコミュニケーション手段とインフラの改良が都市ルネサンスの全国への普及に大いに貢献していることは間違いない。

もう一つは印刷・出版物の急増である。その影響は、ボーゼイが強調するように、都市ルネサンスにかかわる情報の伝達の点でとても大きいものであった。たとえば新古典派様式の建物のデザイン集や最新流行の商品のカタログの出版、『ジェントルマン・マガジン』に代表される新しいファッショナブルな生活スタイルが掲載された雑誌、新聞に見られる商品やイベントの広告などはすべて都市ルネサンスに直接的な影響を与えたものである。しかし、そうした機能に加え、印刷・出版物は各都市が自分たちの都市を外に向かってアピールする手段にもなりえたのである。長期の 18 世紀には、新聞の発行部数が増えただけでなく、新聞の数そのものも急増したが、それはロンドンや大都市だけでなく、中規模の都市もまた、自身の新聞を発行しはじめたことによるものである¹⁹。キングス・リンの地元紙 *Lynn and Wisbech Packet* (1800-02 年) のように発行してもすぐに廃刊になってしまう地方紙も少なくはなかったが、地元のニュースを発信しようとする傾向は注目に値する。また比較的古くに発刊された地方紙も、18 世紀中にそのスタイルを変えていくことがわかる。たとえば *Norwich Mercury* (1722-1998 年) や *Norfolk Chronicle* (1776-1955 年) は、18 世紀後半まではロンドン紙の記事から借りてきた国内ニュースや、せいぜい発行地であるノリッジのニュースくらいしか掲載されていなかった。しかしその後、キングス・リンやグレート・ヤーマスなどノーフォークのいくつかの都市に特派員を置き、彼らが記事を直接書くようになると、地方都市のイベント情報

¹⁹ Barker, H., *Newspapers, Politics and English Society, 1695-1855*, London (1999).

や店舗の広告をはじめとする多様な情報も載るようになった。こうした中小都市の情報が広範囲の地域の読者たちに伝わることは、大都市のみならず中小都市における都市ルネサンスへのインセンティブになったと思われる。

新聞に並ぶもう一つの重要な印刷物に都市史があげられる。都市史編纂は 18 世紀に多くの都市でブームになったが、当時の都市の繁栄を称賛すると同時に、その繁栄をもたらした都市の過去の歴史にも敬意をはらうものであり、歴史と当時の状況を詳細に記録している²⁰。スウィートは、こうした都市史編纂をとおり、人々は都市への帰属意識を高めていったことを主張しているが、都市史に書かれる都市の繁栄、すなわち都市ルネサンス的側面が、印刷物の形で多くの読者に伝わっていったことも重要である。

しかしながら、アメニティを高める改良が進む一方で、都市が成長するにつれ、犯罪や公害、貧困者や浮浪者といったファッショナブルな空間を壊す要素も増加していったことを指摘する必要がある。都市は、快適な都市空間を作るためにこうした要素を排除しようと試みなければならなかった。たとえば前述の街灯は、真っ暗な中、夜のイベント会場に行く不便の解消や防犯の意味もあった。増加する犯罪を少しでも減少させ、安心して夜の社交を楽しんでもらうために、有給の夜警を雇う都市も多かった。また、増加するゴミや障害物がアメニティを喪失させないように、これもまた有給の掃除人を雇い、通りの清掃や監視を行うようになった。貧困者や浮浪者の存在は、犯罪の危険性を増し、都市空間の審美性も失わせることになりかねない。都市ルネサンス的な空間を作り維持するという見地からも、都市は貧困者や浮浪者の対策を迫られたのである。

人々はこうした都市環境の変化の中で、アセンブリや演劇、音楽会、展示会といったイベントを楽しんだ。また、クリケットやボーリング、ボートなどのスポーツ観戦や、競馬や闘犬、闘鶏といった動物競技も人気があった。しかし、イベントの内容そのものを楽しんだというよりは、



ウィリアム・ホガース『笑う聴衆』

²⁰ Sweet, R., *The Writing of Urban Histories*.

むしろ思い切り着飾ってたくさんの人々が集まる場に足を運び、仲間同士の親交を深め、同時に社会的地位をみせびらかすことの方に重点が置かれていた。W. ホガースの風刺画『笑う聴衆』では、楽団が真剣に演奏する音楽をそっちのけでおしゃべりなどに興ずる聴衆が描かれている。またドイツ人旅行者の C. モリツは、ロンドンのコンサートでの経験を、「平土間では私の後ろに若い洒落男が座っていたが、彼は自分の靴のピカピカ光る石のついた留め金をみせびらかすために、私の座席の上に絶えず足をのせた。もし私が彼の大事な留め金のために場所を空けてやらなかったら、私の上着の裾に足をのせただろう。」と記録している²¹。こうした例からも都市ルネサンス期の娯楽や消費の主な目的が、社交や見せびらかしにあったことがうかがわれる。

3. アソシエーション

都市ルネサンスのもたらしたものが新しい都市生活様式であったとすれば、その中で、上記で説明した社交や消費に並んで重要な役割を果たしたものにボランティア・アソシエーションがある。ボーゼイもアソシエーションに触れていないわけではないが、正面から扱っているとはいえない。しかし 18 世紀の都市的生活様式を考えると、これは「都市ルネサンス論」の中で、もっと強調すべきポイントである。クラブやアソシエーションの歴史を詳細に検討した P. クラークも、それらが都市ルネサンス時代を特徴づけるものとしてとらえ、アセンブリや演劇、音楽コンサートなどの商業イベントと並ぶ新しい社交の形態の一つとして、その他の社交の形態と競合しながら発展していったとする²²。

イギリスのアソシエーションやクラブの起源は 16 世紀までさかのぼるとはいわれるが、王政復古期以前にはほとんど存在しなかった²³。王政復古をきっかけに少しずつ数は増えていったが、名誉革命期までは限定された種類のアソシエーションがロンドンを中心に組織されているだけであった。イギリスでアソシエーションが本格的に成長しはじめたのは名誉革命期以降であり、とりわけ 1730 年以降には顕著なものがあつた。消費革命や富の拡大、新しいレジャー

²¹ Moritz, Carl Philip, *Journeys of a German in England: A Walking-Tour of England in 1782*, Nettel, R. tranl., London (1983), p.61.

²² Clark, Peter, *British Clubs and Societies 1650-1800: The Origins of an Associational World*, Oxford (2000). 一方、クラブやアソシエーション、その他の新しい社交は、中世以来のギルドやフラタニティの活動の延長にあると議論する者もいる。ギルドはメンバーやその家族との懇親をはかるために、饗宴や各種イベントを行っており、それらがアソシエーションや新しい社交イベントの前身であったと考えている。King, Rebecca, 'The sociability of the trade guilds of Newcastle and Durham, 1660-1750: the urban renaissance revisited', in Berry, H. & Gregory, J. eds., *Creating and Consuming Culture in North-East England 1660-1830*, Aldershot (2004). しかし、そうだとすると、都市ルネサンス期のアソシエーションや社交イベントの種類や数の多さは、その前の時代とは比較にならず、この時代の特徴としてとらえることに問題はないであろう。

²³ Clark, P., *British Clubs and Societies*.

や新聞・印刷物にあおられた社会革新の欲求に刺激される一方で、中央政府の統治能力が弱まり、宗教の多元化が進み、国家や教会の役割が変化したことが要因となって大きく発展をとげたのである。このアソシエーションの成長は、まさに都市ルネサンス期に重なっていた。

アソシエーションは、基本的に何か目的をもって組織されるものである。飲食等を通じてメンバーの親睦をはかるジェントルマンクラブやフリーメーソン、オドフェロー、カウンティ・ソサエティから、建設的な目的を掲げた上での親睦をはかる団体である文芸哲学協会やディベート協会、音楽協会から、趣味やスポーツ団体、相互扶助や慈善のための組織に至るまでたくさんの種類が存在した。さらに、18世紀末になると、劇場や図書館、学校、道路などのインフラや文化施設を敷設する費用を調達することを目的とした出資型アソシエーション subscription association が生まれた。

都市に特有の存在であるイギリスのアソシエーションは、ヨーロッパ大陸と異なり、国家や政府はその活動に関与しないという特徴をもつ²⁴。一方、アソシエーションそのものも、都市社会全体に対する統治機能や規制機能をもつことがない。各々の団体が独自の会則や基本原理をもって組織を運営しており、ギルドと異なりアソシエーションでは入会も退会も個人の自由な意思で行われる。こうした点で、アソシエーションは私的な組織と考えられる。

しかし私的な組織とはいえ、18世紀のアソシエーションは社会から隔離された存在ではなかった²⁵。年次活動報告書の出版や自分たち主催のイベントの新聞広告など、その活動が社会に認められるよう、積極的に活動内容を公開していた。それまでは私邸で行うが多かった例会も、18世紀になるとインやタパーン、エールハウスやコーヒーハウスなど公共の場で行うようになっていた。そして劇場や図書館、病院の設置のように、都市の公共施設や公共事業、社交圏の形成や発展に資するものも少なくなかった。この点が、18世紀社会におけるアソシエーションの重要な役割の一つである。後で触れるように、地方行政府にインフラ整備の資金が不足していた長期の18世紀において、ミドリソートやジェントリが潜在的にもっている運用資金をうまく集めることは必要不可欠であり、その役割をアソシエーションは担ったのである。

アソシエーションのもう一つの重要な役割は、ネットワークの形成である。都市ルネサンスを達成させるための重要な要素は、人々、とりわけ都市の富裕層や貴族・ジェントリたちのネットワークの形成にあったが、アソシエーションは社会関係資本の構築を促すものとして、大きな役割を果たした。というのも、都市が成長するにつれ、商工業者とジェントリ、伝統的エリー

²⁴ Morris, R.J., 'Voluntary societies and British urban elites 1780-1850: an analysis', *Historical Journal*, 26-1 (1983).

²⁵ Clark, P., *British Clubs and Societies*.

トと新興エリート、異なる宗派や党派など、都市には多様な人々が存在するようになったが、こうした都市社会における異種の人々を結びつける役割を果たしたのがアソシエーションであったからだ。アソシエーションの構成員は大半が男性であったが、上層の貴族やジェントリから中下層の商工業者、職人、都市から農村に至る幅広い社会層の参加が可能であった。もちろん、現実には幅広い階層をすべて含むようなアソシエーションがあったわけではない。アソシエーションの構成員の数は、出資型アソシエーションを別にすると、一般的には比較的少なく、数人から多くても 20～30 人であった。各アソシエーションは相応のまとまりがあり、共通の帰属意識をもつわけで、したがってあまりにも格差のある人々が一堂に会したとは思えない。しかしアソシエーションは多数存在し、各人が複数のアソシエーションに所属することも多々あったため、党派や宗派、職業、社会階層を超えたネットワークができあがっていったのである。

このネットワークに多くのジェントリが含まれることは、都市社会にとってとりわけ重要であった。まず、彼らはプロジェクトの資金集めに一役買ってくれる。また中央政府に相対的に強いコネクションをもつジェントリは、都市が中央政府に陳情をする際にも役にたつ存在であった。さらに、都市との緊密な関係をもったジェントリが各種社交イベントに参加することは、そのイベント、ひいては都市全体のステータスを上げることになった。ジェントリが都市の社交の場に参加することは、ポライトな雰囲気高めるためにもとても重要であったのだ。このことは、アセンブリやコンサート、演劇などの新聞広告や、イベントの後に掲載される新聞記事を見るとよくわかる。新聞広告には、イベントの内容や日時だけでなく、参加予定のジェントリの名前が書かれることもあるし、イベント後に掲載される新聞記事には、貴族やジェントリの出席者の名前や彼らの服装、同伴者などの情報もしばしば報告されている。興味深いことに、ジェントリはリゾート都市や州都市といったファッショナブルで名の通っている都市にだけ、訪問または居住していたわけではない。バーミンガムやリバプールといった新興工業都市や港湾都市であっても、ファッショナブルな都市に負けないような魅力、すなわち社交の場が供給されれば、ジェントリは集まってきた²⁶。新興都市は様々な社交機会の創造に励みジェントリを惹きつけようとしたが、その一端を担ったのが、ボランティア・アソシエーションであったのだ。

²⁶ Schwarz, L., 'Residential leisure towns in England'; Stobart, J. & Schwarz, L., 'Leisure, luxury and urban specialization in the eighteenth century'.

IV 都市ルネサンスの担い手

都市ルネサンス的空間を追求するために必要なインフラや社交・文化施設には大きな資金を必要とする。個人の邸宅やファサードの統一くらいまでは各個人の出費で進められただろうが、改良事業費が大きくなればなるほど、そして公共性が高くなればなるほど、個人の負担で実現するのは難しくなる。それは誰のイニシアティブで、どのような方法で調達されたのだろうか。そしてそれらの施設で行うイベントを企画していたのは誰だったのだろうか。ボーゼイはこの問題についても触れてはいるが、その考察は十分とはいえない。以下では、キングス・リンを例にあげながら、この問題を検討してみたい。

真っ先に考えられるのは、自治都市の場合、少数のフリーメンから構成されるコーポレーションである。コーポレーションは事実上の都市政府として、都市全体のインフラ整備にかかわっていた。しかしその活動は、基本的にそれが所有する土地・家屋・施設からの地代収入や使用料収入という限られた予算の中で行われるものであった。都市ルネサンスが進み、コーポレーションが伝統的に行っていたインフラ整備を超える要求が出てくると、その都度、コーポレーションは債権や年金証券を発行するなどの手段をとって、必要な資金を調達することがあった。ごく少数の、しかもしばしばキングス・リンの外に住んでおり、この都市とは直接的な接点がないようにみえる者が、数百ポンドから千ポンドを超える巨額な額面を引き受けることもあった。しかしそうした資金調達も地代などの定期収入の限界を超えることはできず、コーポレーションが改良事業の積極的担い手になることは基本的に難しかった。イベントに関しては、市長就任式などの際に催す正式なアセンブリの他に、コーポレーションが企画をすることはめったになかった。

大きな資金を伴う改良事業が望まれるようになるにつれ、自治都市でも非自治都市でも、18世紀後半から、道路舗装委員会や街灯委員会のように特定の目的をもって組織される法定委員会が担い手として重要となる。自治都市の場合、これにはコーポレーションのメンバーだけでなく、幅広いエリート層を構成員に含むことが可能であった。法定委員会の形成には、議会の承認を得なければならない煩雑な過程はあったものの、法定委員会は独自に課した使用料を活動資金として利用することができた。そのため、活動に伴う多額の資金を調達しなければならない場合には、多くの都市で法定委員会制度が導入された²⁷。しかし、使用料収入が見込まれ

²⁷ Falkus, Malcolm, 'Lighting in the dark ages of English economic history: town streets before the industrial revolution', in Coleman, D.C. & John, A.H. eds., *Trade, Government and Economy in Pre-Industrial England: Essays presented to F.J. Fisher*, London (1976); Jones, E.L. & Falkus, M., 'Urban improvement and the English economy in the seventeenth and eighteenth centuries', in Borsay, P. ed., *The Eighteenth Century Town: A Reader in English Urban History, 1688-1820*, London (1990), ori. 1979; Innes, Joanna, & Rogers, Nicholas, 'Politics and government 1700-1840', in Clark, P. ed.,

るのはインフラや施設が完成した後の話である。そのため建設の収入源は各々が見つけなければならなかったが、法定委員会証券の発行によって一時的な活動資金を集める手段もしばしばとられた。キングス・リンの道路舗装委員会の場合、都市住民を中心に近隣に住むジェントリも加わり、百ポンドから数百ポンドの範囲で、多くのキングス・リン関係者が道路舗装委員会証券を引き受けていたが、この点はコーポレーション債権や年金証券の引き受けられ方とは対照的である。また、コーポレーションと同様に、法定委員会はインフラの敷設が主たる目的であり、イベントの企画に関しては携わらなかった。

法定委員会と並び、18 世紀に積極的にルネサンス的環境を整えるのにかかわったのが、前節で触れたボランティア・アソシエーションである。これは法定委員会よりもずっと臨機応変に設置し解体できる便利な組織であった。前述のように様々な種類のアソシエーションが都市ルネサンス期に見られたが、インフラや文化施設の建築のために資金を集め改良事業に取り組む団体は、アソシエーションの中でもかなり規模が大きい²⁸。というのもコーポレーションや法定委員会と違って、アソシエーションの収入源は会員の入会金と年会費のみであり、大きな資金を伴うプロジェクトの場合、ある程度以上の人数を集める必要があるからである。出資金集めを目的とするアソシエーションは 18 世紀末に出現したが、この種の団体は必ず、どれもがその構成員に大半の富裕者層を含むので、アソシエーションごとの構成員の重複が多々見られた。一方、イベントの企画という面からみると、前述のコーポレーションや法定委員会と異なり、多数のアソシエーションがかかわっていることが確認できる。

コーポレーション、法定特別委員会、ボランティア・アソシエーションといった別個の組織が、どのように都市環境の改善にかかわったかは、都市ごとに異なるだろう。少なくとも 1835 年までの地方都市の行政は自治に任される部分が大きく、全国共通の各組織の決まった役割分担はなかった。伝統的自治組織のコーポレーションと新しい行政組織の法定委員会や、非公式ではあるが、ある意味行政組織であるボランティア・アソシエーションがお互い反目しあう都市もあったし、逆にうまく協力しあう都市もあった。ある一つの組織が強力なイニシアティブをとった都市もあれば、どの組織も活発に動かない都市もあったであろう²⁹。これは、各組織のメンバー同士のネットワークの問題も大きく関係する。一例をあげるならば、キングス・リンでは、法定委員会やアソシエーション主導のプロジェクトに対し、コーポレーションが資金援助をす

The Cambridge Urban History of Britain, vol. II, Cambridge (2000); 小西「地方行政組織の変化と連続」; 小西「長期の 18 世紀イングランドの地方都市行政とコミュニティ」。

²⁸ Berry, Helen, 'Creating polite space: the organisation and social function of the Newcastle assembly rooms', in Berry, H. & Gregory, J. eds., *Creating and Consuming Culture in North-East England 1660-1830*, Aldershot (2004).

²⁹ Sweet, R., *The English Town, 1680-1830: Government, Society and Culture*, London (1999); 小西「地方行政組織の変化と連続」; 小西「長期の 18 世紀イングランドの地方都市行政とコミュニティ」。

るために法定委員会証券の引受人になったり、アソシエーションの(法人)会員になったりと、非常に友好的な協力関係にあった。したがって、従来よくいわれていたように、決して伝統的で閉鎖的なコーポレーションが強く残る都市では都市改良が進まなかったというわけではない³⁰。党派や宗派、伝統的エリートと新興エリートといった対立構図で 18 世紀のイギリス都市は説明されることが多かったが、実際は一見別々のグループの構成員が複雑に絡み合って機能していたのである。

都市ルネサンス的な空間を作るのに貢献したのは、何もアソシエーションなどの団体だけではない。とりわけ娯楽や社交のためのイベントの企画という面では、個人ベースで利益を追求する商工業者や専門職が大きな役割を果たした。その一端を示すのが商工業者人名録である。1780 年代以降、イギリス全国で商工業者人名録が続々と発行されたが、キングス・リンの例でみると、18 世紀後半には、絵描き、香水商、時計職人、本屋、文房具商、陶磁器商、銀細工商、馬車製造業者、競売人、髪職人、椅子職人など新しい職業が増え、ファッショナブルな商品を扱うものがたくさん出てきたことがわかる³¹。また、インやタバーン、エールハウス、コーヒーハウスでは、飲食の場であっただけでなく、各オーナーや企業家が企画したイベント、たとえば演劇、展示会、闘鶏、アセンブリ、舞踏会、カードゲームなどを催行していた。これらの施設では、ファッショナブルな雰囲気を出すために内装や部屋の作りを変えて、人々を惹きつけていた。

しかし 18 世紀の都市社会にはもう一つ重要なグループがいた。都市ルネサンス期の都市社会では、ファッショナブルなイベントや商業施設に目が向きがちであるが、忘れてならないのが専門職の提供するサービスであった。都市は専門知識や情報を提供する場であったが、その中でもとくに法律家の役割は大きい。たとえばキングス・リンの近隣農村に住んでいたアンソニー・ハモンドというジェントリはほぼ毎週キングス・リンに通っていたが、その一番大きな目的は弁護士との会見であった。彼は、土地の管理、金融商品、子どもの金銭上の不始末、娘と息子の結婚話の仲介、遺言や遺産目録作成など様々な相談をしていた³²。また、学校やアカデミーの数は、全寮制の学校から通学制に至るまで相当数にのぼり、種類も豊富であり、キングス・リン内外の男女の子どもが通っていた。さらに、法律家、医者、聖職者、学校の教員といった専門職は、対個人だけでなく、対社会でも重要な位置を占めており、教養をもっている知識人として、何かにつけてプロジェクトをまとめる際に召集されていた。これら専門職は、18 世紀都市社会が円滑に機能するための重要なエージェントであり、都市ルネサンスに不可欠

³⁰ Webb, S. & B., *English Local Government, vols. 2-3, the Manor and the Borough*, London (1963).

³¹ 小西「近世イギリス都市におけるフリーメン制度の意義」；小西「18 世紀末イギリス地方都市社会の多元的構成—キングス・リン救貧課税記録の分析を中心に」『専修大学人文科学研究所月報』234 号 (2008).

³² Norfolk Record Office, HMN 4, Hamond Collection.

な担い手でもあったのである。

おわりに

「都市ルネサンス」論を批判的に再検討するのが本稿の課題であった。ボーゼイによって出されたこの概念には、これまでも多くの批判が寄せられてきたが、それらを取り入れ、より広く柔軟な解釈をとれば、「都市ルネサンス」論は長期の 18 世紀における都市、さらには 18 世紀イギリス社会の特質を解明するために非常に有効な準拠枠組みになりうるのである。

本稿で再解釈した都市ルネサンス論が有望なのは、それが 18 世紀の都市を舞台にして展開された様々な新しい社会現象を視野に収めることができるからである。ポライトなマナー、消費文化、レジャー産業、印刷・出版文化、ジェントリ、ミドルリングソート、社会移動、地域のアイデンティティなど、現在でも研究者の間で熱心な議論が交わされている問題はすべて、都市ルネサンス論に関わりをもっている。ボーゼイはあまり言及しなかったが本稿で特に強調したのは、都市ルネサンスの時代に生まれた新しい社交様式としてのアソシエーションである。アソシエーションは目的、形態、規模、構成員、機能などの点で異なる多様な性格のものがあり、一義的にとらえることはできない。しかし新しい社会関係のあり方としての「アソシエーション」は、都市ルネサンスの展開を直接的にも間接的にも支える重要な人的要素であり、しかも時代が進むにつれて重要性を増し、しだいに様々な社会集団や階層に広がっていった。それが「都市ルネサンス」の性格の変化と関係があったか否か、さらには、市民社会や公共圏、階級の形成や変化といった、より大きなテーマとどう結びつくかは、今後検討すべき課題である。しかし「都市ルネサンス」論がこれら多様な諸問題にアプローチするための重要な糸口になることを明らかにできたとすれば、本稿の目的は達せられたことになる。